

地雷

大島 行雲

地平線の向こうまで続く長い一本道。舗装はされず、あちこち凹凸になって、所々、赤黒い水溜りができている。

道の脇には簡素な標識が無造作に立てられていた。髑髏の絵が描かれている。交通標識ではない。地雷注意の標識だ。

路上には五人の男女がいた。

「ごつごつした顔で軍服を着た中年男性ミノルは、震える右手を左手で押さえ、何やらまくし立てている。

軍人よりも幾らか若い中年女性トミコは、それを黙って見ている。

背が高い若い青年テツゾウは、軍人ミノルを気にする素振りを見せながらも路面に向かって笑っている。

小柄で髪の短い少女マキコは、そんな三人の様子を複雑な面持ちで見つめていた。

そして、四人から離れた場所で臉を閉じ、杖を手にした老人が地平線に向かって立っていた。

「北が攻撃してきたら、どうする？ おまえらだつて家の玄関には鍵をかけるだろう。台所にゴキブリホイホイを仕掛けるだろう。地雷は重要な武器なんだよ」

軍人ミノルは手にした焼酎の瓶を喇叭飲みして、皆に怒鳴り

散らす。

「たしかに攻撃されてきた時を考えると、ここに地雷を敷設することは必要だったのかも……」

中年女性トミコが納得顔で頷いた。

「うん、でも、まずは武力じゃなくて平和的解決が大事じゃありません？ お互いが徹底的に話し合って、衝突を避けるようにしないと……」

笑顔で反論する青年テツゾウを見て、少女マキコは口を開きかけたが、途中で止めた。

そして、四人から離れた場所で臉を閉じ、杖を手にした老人が髑髏の標識に開いた弾痕を指でなぞっていた。

「そんな甘いこと言ったら、侵略されちまうぞ！ おまえら、あんなクソ野郎どもの奴隷になってえのか！ やられる前にやるぐらいの気迫がなくて、どうすんだよ。やつらが来たら、地雷原踏んで、バラバラの肉の切れ端にしてやんだよ！ ハッ！」

軍人ミノルは大袈裟な身振りを交え、他の人々に威勢良く言い放った。

「いや、侵略されるのは困りますけど、やっぱりここは話し合います。彼らだつて話し合えば分かりますよ。同じ人間なんですから」

困り顔で言う青年テツゾウに、中年女性トミコが首を縦に振

る。

「そうですね。彼らだって同じ人間ですよ。話し合うことって大事ですよね」

「……あの、でも、地雷って、敵だけがやられるものじゃありませんよね……」

少女マキコが言った。

「それもそうね。難しいわね」

中年女性トミコが顎に手をやって、考え込む。

「とにかく、こんな炎天下でうだうだ話しても始まらない。どうか涼しいところへ場所移すぞ！」

軍人ミノルの鶴の一声に、青年テツゾウと中年女性トミコが従い、町へ向かって歩き始めた。

どうしたものやら躊躇い顔で、少女マキコは周囲を見回す。

そして、四人から離れた場所で臉を閉じ、杖を手にした老人が、地雷原に足を踏み入れようとしていた。

「あ！」

慌てて少女マキコは老人に駆け寄り、彼の左肩を掴んだ。

「待って！ 危ないですよ、そこには地雷が……」

老人の横に立とうとした少女マキコを、老人が不相応に強い腕力で強引に止めた。

「？」

少女マキコの足下を老人が見つめている。彼女が老人の視線

の先を追い、その意味を知った。

地面に僅かに人工物の突起が顔を出していた。地雷だ。危なく踏むところだった。

「え？」

思わず少女マキコは顔を上げた。

すると、臉を開いた老人が、彼女に微笑んで言った。

「……大事にしなさい……」